

大谷さんのボランティア活動

岩井鶴二

tsuruji@silver.ocn.ne.jp

平成 27 年 12 月 30 日

2006 年の確か年末だったと思う。朝NHKのTVを見ていたとき、突然大谷さんが現れて話をはじめた。久しく会っていないので先ず懐かしさがこみあげた。そのとき大谷さんがどんな話をされたのか今になってはさっぱり忘れていた。早々に大谷さんへ電話をしたのだろうと思う。ほうぼうから電話がかかってくる中、「おまえ、よう生きとったな」とふざける野郎もいたと笑っていた。

数日して大谷さんから二十数頁にわたる「海外と文化を交流する会」の会報が送られてきた。

特集号でタイトルは「2006 日豪交流記念現代日本画展 メルボルン」。期間は同年 11 月 20 日～12 月 8 日。まえがきには「この会は 1968 年に誕生し、当会から豪州に現代日本画 25 点を寄贈したのが 1977 年で、その日本画 25 点を「日豪交流年」に展示することになった」とある。

日程はビクトリア州議会議事堂クイーンズホールで 11 月 20 日から 5 日間、後半は王立メルボルン工科大学ギャラリーで展示、展覧会の初日には芸術大臣主催のレセプション、後半にはアーツ・ビクトリア所長主催のレセプションが組まれている。

通常の展覧会と違っているのは、シンポジウム「日本画と日本の美」と交流会が後半の三日間にわたって組み込まれていることである。議事進行には当会理事の大谷さんと中野さん。創画会会員で多摩美術大学教授北條正康先生の「日本画と日本の美—古典から現代まで」、次いで会長の青山学院大学名誉教授ジョージ・ギッシュ先生の「異文化交流から学ぶ」の講演が続く。圧巻は、北條正康先生の日本画製作の実演だろう。水彩や油絵では、画用紙かキャンバスにチュウブからだした色を塗ればいいが、日本画では粉末の岩絵具を白血に採り、接着剤のニカラ液を加えて練って始めて筆で塗れる状態になる。黒

色は墨を硯ですって出す。始めて見た人にはその手間ひまにビックリしただろう。この実演の後には、質疑応答と交流会が組み込まれている。

特集号では 25 点の日本画のコピーが並ぶ。作者の名前を見て驚嘆した。

寄贈当時では、文化勲章受章者は無かったが、それから 30 年たってみると、奥村土牛、橋本明治、山口華陽、高山辰雄、上村松皇、福王寺法林の 6 名の大家が受賞しており、さらに文化功労者 4 名の大家が加わっている。寄贈当時の作者の年齢を推測すると 61 歳が最高で 50 歳代が 3 名、あとは 3, 40 歳代が殆どで、いずれも日本画を代表する、新進気鋭の作家達である。日本の紹介が念頭にあつてか富士山が 4 点、舞妓が 2 点、奈良風景が 2 点、大きさは 20 号から 30 号あたりが多い。なかには 50×100cmの大作もある。

これ等現代の代表的な日本画 25 点は 1977 年、大谷さんのおば様にあたる当会の創設者 松岡朝さんの絶大な努力によって、メルボルンで展覧会を開き、そのすべてが寄贈されたのである。松岡様は米国コロンビア大学でドクターを取得し海外交流に尽力された、スケールの大きいお方であるが、寄贈された翌年の日本経済新聞に題名「日豪の心を日本画で結ぶ」で、ご自身が当時を述懐されている。驚いたのは 84 歳の老齢で、この快挙をされた事である。現代の代表的日本画 25 点の展覧会を開き、そのすべてを寄贈したのが生涯で番嬉しかったと言っておられる。この素晴らしいプレゼントにファーマー・ビクトリア首相は開会式で「今回のことはオーストリアと日本とが平和条約を結んだことより、もっと深く両国民の心を結んだ」述べられた程だと感銘を述べられている。前述したように国宝級の名画 25 点の出品には当時の佐藤栄作首相や著名な美術評論家 河北

倫明氏の懇切な助言や励ましがあったからだ
と当時を振り返っておられる。それにしても、少なく
とも 25 人の第一戦にある画家に趣旨を話し賛同
を得て絵を頂くのは大変なお仕事である。全部
揃うのに 4 年かかったとだけ言っておられるが。

それから 30 年後、大谷俊介さんの出番がやっ
てきた。先ず絵の所在を確かめることから始めね
ばならぬ。寄贈当時にはメルボルン・ナショナル・
ギャラリーに保管されているはずだったが、不明。
大谷さんがどんな手立てで所在を確かめたのか、
会ったとき聞いてみたが答えは「倉庫にほこりを
かぶって寝ていた」とそっけない。この間の事情
はジョージ・ギッシュ当会会長が文化交流の痛み
と喜びに痛みとして触れられている。特筆すべ
きは、「百聞は一見に如かず」と、北條正康先生に
依頼されて日本画の特異性を実演されたことであ
ろう。

大谷さんはこの日豪交流 30 周年を期して、
「顔の見えない文化交流は意味をもたない。まず
は相手のことを知らねばならない」として「オース
トラリアを知るための 55 章 越智道雄著、明石書
店 2005 年」等 7 冊の本を読まれている。その結
果だろう、特集号では「中世を持たない多民族国
家オーストラリア アメリカとの比較」にまとめ、さら
に付録の項では、オーストラリアの 2006 年当時
の面積、人口、言語、人種、内政、軍事力、国内
総生産(GDP)等々 25 項目で日本と比較しつつ
記載されている。これ等の記載は、研究で多忙
な中での読書によって得られた結果だと思えば、
ただただ頭をたれるばかりである。

その後は、海外と文化を交流する会の会報が
毎月送られてきた。時々、教会での音楽会や夏
山のキャンパスやらの御誘いがあった。ぐーだ
らで出不精の私はずいづいご無礼した。

大谷俊介さんに最後に会ったのは 2011 年
秋である。

その 11 年前から私は枚方市御殿山の美術セ
ンター(旧大阪美術学校の跡)で日本画を習って
いて、この年には、NICE でいっしょだった木村正
広さんが勤めていた「高知工大キャンパス」の一
角を絵にして、年に一度の合同展覧会(日本画、

洋画、彫刻、陶器など)に出品していた。木村さ
んのアレンジで、大谷さん、小林信夫さん、松本
敦さんの 4 人と久しぶりに会った。多くの出品作
を一巡して、御殿山を降り、淀川の堤防つたいに
3 キロ程の道を枚方市駅に向けて歩いた。秋風
に快くなでられながら歩いた。

喉の手術をした大谷さんも気持ちよさそうに歩
いた。天満橋の食堂で夕食。大谷さんは飲むワ
インが三分の一に減ったといていた。一行は翌
日から奈良方面をまわる予定だった。大谷さんと
握手して別れたのが図らずも永遠の別れとなっ
た。大谷さん有難う、やすらかに眠りください。